

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：12101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26750244

研究課題名(和文)「いのちの教育」における「身体」の位置づけ - 歴史的展開からの再考 -

研究課題名(英文) The Study on Positioning of Body in Life and Death Education by Reconsideration  
Historical Development

研究代表者

青柳 路子 (AOYAGI, Michiko)

茨城大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：70466994

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、いのちの教育で身体がどのように位置づけられてきたかを、日米の比較を取り入れながら、歴史的な展開を明らかにすることで再考し、今後のいのちの教育における身体の位置づけについて展望したものである。

アメリカのデス・エデュケーションと日本のいのちの教育を比較すると、理論的な面では両者とも身体に注目した研究は見受けられなかった。一方、日本の教育実践では、子どものいのちを育むという視点から身体に注目したものや、後景ながらも身体に言及した実践が見受けられた。日本のいのちの教育は、アメリカからの影響を受けつつも独自に展開し、近年は心の面に傾斜しながらも身体をとおしていのちを学べる教育でもあった。

研究成果の概要(英文)：In this study, I reconsidered how the body has been positioned in the life and death education by revealing that historical development, comparing Japanese "education of inochi" with the death education of the United States, and examined the prospect of the positioning of the body in future life and death education.

Comparing the Japanese "education of inochi" with the American Death Education, both did not take up the body in theoretical aspect of research. On the other hand, educational practice of school in Japan, we could see several examples that focused on the body from the viewpoint of nurturing the life of children. "Education of inochi" in Japan has developed independently, despite being influenced from the United States, and in recent years learning the mind, children could study "inochi", life and death through the body.

研究分野：教育学、教育人間学

キーワード：いのちの教育 デス・エデュケーション 身体

### 1. 研究開始当初の背景

文部科学省『生徒指導提要』における「命の教育の意義」では、急激な社会変化の中で子どもたちが命を実感したり、死に触れたりする機会が減少し、命の認識に関する危機的状況にあること、また命に関する感受性が弱まっていることから命の教育の必要性を強調している。この「命の教育」は、命の認識や命の感受性のみならず、子どもたちの死生観の形成や醸成においても重要であるだろう。

「命」は、日本語では「いのち」「生命」等とも表記される。とりわけ「いのち」は生物学的な理解、すなわち生命の一回性や有限性に視野を限定せず、親から子へなど受け継がれる性質に注目して用いられる傾向がある。その「いのち」を標榜した「いのちの教育」が、日本では教師や研究者らによって実践・研究されてきた。「いのちの教育」では、生ばかりでなく死にも目を向け、多面的・多角的な視点から「いのち」を取り上げようとするものである。

この実践・研究を遡ってみると、1980年代以降、アメリカからの影響を受けて学校教育でデス・エデュケーションが取り込まれ始めたことが一つの契機となっている。以後、多くの実践が行われるが、1990年代後半に少年による凄惨な事件が相次ぐと、教育の現場で必要とされるのは死についての教育だけではなく、自他の尊厳も含めた生にも向けられていく。その後の2000年代には、生や性、死を含めて、日本独自の「いのち」という概念に基づいた「いのちの教育」が定着する。この「いのちの教育」には、特に1990年代後半以降の少年による事件やいじめなどの教育課題から、「心の教育」としての役割が期待されることが多く、「いのちの教育」の取り組みもその要請に応えようとしてきた。

この一方、初期に学校教育において生や死を取り上げた教育実践をみると、教師たちは「身体」を重視していたことに気づかされる。たとえば、ニワトリを殺し食べる授業実践を行った鳥山敏子は、「いのち」や性、死についての知識理解だけではなく、子どもたち自身が体で感じていることを重視して、ニワトリになったイメージで体を動かし、体験することを授業に盛り込んでいた。また金森俊朗は、一連の生と死の授業の総仕上げとして、子どもたちに「個性人体図」を作らせ、等身大の自分を象った図に、今の自分を成り立たせるものや病気の経験を書き込むという、身体と関わる授業実践を行っていた。

「いのちの教育」のために、子どもたちの死の理解や死生観の発達についての調査、あるいは学習指導要領における「いのち」の取り上げられ方の分析や、海外における生と死の教育の調査、精神的・宗教性との関わりからスピリチュアリティと教育についての理論的研究が蓄積され、教師たちによる実践も

積み重ねられてきた。しかし、いまだその歴史的展開を詳細に整理した研究は見られない。このため、今後の日本において、子どもたちの死生観の醸成につながる「いのちの教育」をさらに発展させていくためには、これまでの生と死の教育について検討すること、さらにはその「いのちの教育」に、各人がもつ「心」に加えて、各人が生きるその「身体」を明確に位置づけ直すことが必要であると考えた。

研究代表者は、これまで、現代における死生学のパイオニアとも言われる E. キューブラー＝ロスの思想研究に取り組みながら、生と死の教育の実践にも深い関心を抱いてきた。また、死が差し迫った中で人はどのように生き、その渦中でどのような人間形成がなされるのかについて、闘病記を資料とした研究にも取り組んだ。闘病記をもとにした研究では、「病い」や「痛み」という身体にあらわれる兆候・変化が人々に大きく影響しており、死生観を培うための教育において「身体」からアプローチすることの重要性を見いだすことになった。加えて、研究代表者が過去に研究分担者として取り組んだ美術解剖学における研究において、医学系学生の人体解剖実習後のレポートおよび美術系学生の人体解剖見学後のレポートを比較・検討したところ、いずれの学生も身体への深い理解が自分の生や死を見つめ直す貴重な機会になっていたという結果が得られたことも「身体」への着眼点となった。こうして「いのちの教育」の歴史的展開と、同教育における身体性を問い直したいというのが本研究初発の背景である。

### 2. 研究の目的

本研究は、「いのちの教育」における「身体」の位置づけを問い直すことを目的とした。まず第一に、これまで日本で行われてきた生と死の教育の実践、およびその理論・研究の歴史的展開を詳細に整理し、その展開における「身体」について問い直す。第二に、「身体」や「いのち」を取り上げた諸研究や、子どもたちの心身の発達についての研究に学び、これからの「いのちの教育」において「身体」をどのように位置づけ、「いのち」についての学びや死生観の醸成に資するかについて考察した。

なお、本研究では、歴史的な経緯に基づき、「いのちの教育」を広義でとらえ、生と死の教育と同義で用いることにした。

### 3. 研究の方法

本研究では、(1)文献研究を主軸として、(2)インタビューやフィールドワークを有機的に関わらせながら、(3)今後の「いのちの教育」のための「身体」の位置づけについての考察を行った。

**(1)文献研究について:**これまで日本で行われてきた生と死の教育の実践、およびその

理論・研究を詳細に分析し、生と死の教育の歴史的展開において「身体」がどのような位置にあったかについて検討した。また、1980年代の日本ではじまった生と死の教育が、アメリカのデス・エデュケーションを端緒としていると言われていたことから、1960～80年代のアメリカのデス・エデュケーションにおいて「身体」がどのような位置づけであったかも併せて検討し、日米の比較を行った。このとき資料としたのは、1960年代から80年代にかけて刊行されたデス・エデュケーションについての文献のほか、雑誌“*Omega: journal of death and dying*”と“*Death Studies*”である。雑誌はデータベース化されたものを用い、「身体」についての的確な分析ができるようにした。

**(2) インタビュー・フィールドワークについて：**「いのちの教育」で、特に「身体」を重視した実践を行っている者を対象にインタビューやディスカッションを行う他、その実践についてフィールドワークから調査した。

**(3) 考察：**これらの文献調査、フィールドワークをもとに、関係諸分野の研究を参照し、これからの「いのちの教育」において、どのように「身体」を位置づけることが、「いのち」の学びや死生観の醸成に資するかについて考察した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 文献研究から

文献研究では、これまで大きな流れでとらえていた日本における生と死の教育の展開を詳細にとらえることができるとともに、研究当初に押さえていた枠組みの確かさを確認することができた。

日本における文献でデス・エデュケーションが初めて登場するのはロバート・フルトン編著『デス・エデュケーション：死生観への挑戦』（斎藤武・若林一美訳）の1984年である。以降、書籍・論文等でもデス・エデュケーションという言葉が多く見られるようになる。なかでも、同じくアメリカで学んだA.デーケンがデス・エデュケーションを「死への準備教育」とし、著作等で死を取り上げた教育の必要性を積極的に述べたことによって、デス・エデュケーションは教育学だけでなく医療や看護学など幅広い分野でも取り上げられていく。

時期を同じくして、生と死の教育に関する実践も見られるようになる。正確には、これまでも実践は行われていたが、社会的な注目もあって、生と死の教育実践が表面化してきたと言えるだろう。先に述べた鳥山敏子の実践が注目されていくのはこの1980年代からである。このように、生と死の教育に関する研究や実践が顕在化していった背景には、アメリカのデス・エデュケーションの影響があることが明らかになった。この影響を受けて、デス・エデュケーションを実践していくため

に、日本の子どもたちを対象とした死の概念の発達研究なども行われていく。

一方、「いのちの教育」は、1980年代の文献に「性教育」の位置づけでほんの教例みられるが、多用されるのは1990年代に入ってからである。この時期は「死」そのものを強調するよりも、生や性も含めた「いのち」の捉え方がなされる。また大谷いづみが指摘するように、生と死の教育において「いのちの教育」とは異なる教育的意義をもって生命倫理教育も、この時期に行われ始める。こうした動きと呼応して、1990年代には、鳥山とは異なる視点から行われ、生・性・死と多角的な視座からいのちをとらえた金森俊朗の教育実践も注目された。「いのちの教育」は特に2000年代に多くの文献があり、理論的な蓄積もなされるが、2010年代に入ってから動きを牽引するような積極的な研究者・実践者が見られなくなっている。

では、この「いのちの教育」に至る歴史的な展開の中で、身体はどのように位置付いてきたのか。理論的な文献からは具体的に「身体」を取り上げたものは見当たらなかった。厳密に言えば、間接的には身体を取り上げたり、言及したりしているものの、知的理解や心や感情の面が強調され、身体は背景に位置づいていた。他方、教育実践では、子どもたちが生や性を実感したり、自然なものとして受け入れたりできるよう身体を重視した実践が見られた。なかでも、鳥山敏子や金森俊朗の実践では、それが顕著であった。しかし、そうした実践も、2000年代以降の「いのちの教育」においては、身体が背景に位置し、いのちの大切さを情意を通して理解させようとする傾向がうかがえた。

転じて、アメリカのデス・エデュケーションに目を向けると、アメリカでは先にも取り上げたロバート・フルトンらを中心に、1960年代の主に高等教育において、デス・エデュケーションが始まった。死をタブー視する社会にあって、死をできる限り正しく認識し、死にまつわる過度の不安やおそれを解消しようという目的があった。この取り組みは、アメリカにおけるデス・アウェアネス運動とも連動する。

死に対する正しい認識として強調されたのは、患者の権利に対する配慮、悲嘆の症状とその克服、自殺の防止法、葬儀の意義、個人の不死感や万能感に対するいましめ、異文化に見られる死の在り方、死の在り方の歴史の変遷である。こうして、“*Death Education*”（後に“*Death Studies*”に改題）の創刊号に掲載され、長くデス・エデュケーションの目標とされてきたダン・レヴァイトンによる「デス・エデュケーションの範囲」における13の目標では、死にまつわるタブーを優しく取り払い、生徒が不安なく死を読み話することができること、死を迎えようとする人をそのときが来るまで生きていようとする人として接し、相互関係を促進すること、死についての不安を最

小限度にできるように子どもに死についての教育を行うこと、またふさわしく望ましい健全な死の理解のために個人を援助することなどが挙げられていた。このように、アメリカにおけるデス・エデュケーションは、死を正しく認識し、それによって死に対する過度の不安やタブー視を避けると同時に、健全な死の概念の発達あるいは獲得を目指したものとして展開してきた。明確な目標が掲げられていたため、死に関する教育や死生学の文献および学術雑誌“*Omega: journal of death and dying*”と“*Death Studies*”に掲載された論文では、身体そのものを取り上げた研究・論考は見当たらなかった。

以上のことから、日本における「いのちの教育」は、アメリカのデス・エデュケーションに影響を受けたが、実際はアメリカのデス・エデュケーションを十分に咀嚼しないまま、日本独自の取り組みとして展開していったということになる。「いのちの教育」は、子どもを対象に学校教育で取り上げることによって死そのものだけでなく、生や性も含めたいのちの学びとして実践され、子どもが生きていくための生や性・死の学びであった。したがって、その学びにおいてこどものいのちの現れである身体は不可欠であり、この点でアメリカのデス・エデュケーションよりも、特に実践において身体が考慮されていたと言える。しかし、身体は、「いのち」を学ぶときの主題というよりも、むしろ「いのち」を支える土台として学ばれていたのではないだろうか。

## (2) インタビュー・フィールドワークから：

鳥山敏子や金森俊朗の小学校における「いのちの教育」実践は数多くの文献から理解することができるため、デス・エデュケーションに深い関心を寄せ、中学校における実践を行ってきた天野幸輔へのインタビューを行い、天野実践における身体の位置づけと、中学校ならではの取り組みについて尋ね、ディスカッションした。

また研究進捗からの新たな試みとして、「あしなが育英会」に協力を依頼し、フィールドワークを行った。アメリカにおけるデス・エデュケーションにおいて、正しい知識の内容として提唱されたものの一つに、悲嘆の症状とその克服法が挙げられていたことに注目して、今後のいのちの教育の可能性を探るために、親を亡くした高校生・大学生等を対象に奨学支援と独自の教育支援を行っている同育英会がどのように悲嘆の問題を教育的に扱っているのか、同時に悲嘆という身体にも影響を及ぼす深い悲しみに向き合おうとしているのかを探ることとした。

前者の天野へのインタビューでは、死を教育において取り上げることの重要性に対する天野の深い問題意識がうかがえた。同時に、小学生とは異なる中学生ならではの発達段階において、なおかつ学校教育において「い

のちの教育」として身体を取り上げるかについては天野ならではの創意工夫を知ることができた。今回はインタビューとディスカッションのみだったが、天野は現役の教員でもあるので今後はその教育現場に足を運び、フィールドワークを行いたい。

後者の、あしなが育英会におけるフィールドワークでは文献も用いながらその独自の取り組みをとらえようとした。あしなが育英会は、遺児の悲しみを言葉にし表現することをうながしつつ、それを同じ遺児同士で共有することで悲しみの度合いを少しでも和らげ、連帯を深める実践を行っていた。そして、同育英会では悲嘆の問題だけでなく、一個の人間としての成長を奨学生たちにうながす教育を行っていたのが特徴的であった。

## (3) 考察：

「いのちの教育」の実践家や理論家の著述から「いのち」のとらえ方を整理すると「いのち」は観念的であり、個を超えて他者や自然とつながっていくものとしてとらえられている。しかし、いのちの現れでもある身体はそうしたつながり出て行くものを再び個へと還元する。こうした身体のもつ性質をもとに、個から他者・自然へつながり出て行く「いのち」のベクトルを再び自己に戻していくものとして機能させること、なおかつその往還のベクトルを経た上での起点として身体を位置づけることが重要なのではないだろうか。また身体は、想像・イメージを経て他者の経験を体験できるものとしても機能する。こうした身体を通した共有も「いのち」の理解を育む上で重要である。

本研究に取り組んで、日本の「いのちの教育」は単にいのちの大切さを取り上げるだけでなく、子どもたちが生きていくための力を育むことを重視して実践されていることが、特に学校教育において顕著であることが理解できた。しかしながら、人間の死はいつ訪れるかわからない。アメリカのデス・エデュケーションで強調されていたように、死に対するできる限り正しい認識をもつことは重要である。では身体を通して死を実感させればよいかといえば必ずしもそうとは言いきれない。なぜなら、身体が弱まり機能停止することは、子どもが成長・発達を遂げていくのとは逆のベクトルであり、子どもたちにいざらに恐怖感を抱かせないからだ。そうであるならば、死に出会うことが避けられない事実を前提に、子どもたちの生きていく力を心身面から育みながら、死に対する不安や恐怖感を和らげるような生きている実感や新体感を育むことが重要になるのではないかと。

今後の社会では、生活が大きく変化し、生や死のとらえ方も大きく変化する可能性がある。そのようななかであっても、いのちとしての身体を育む重要性を探っていきたい。

また「いのちの教育」はアメリカのデス・エデュケーションから影響を受けて展開し

ていったが、アメリカでは悲嘆の症状やその克服法（現在ではコーピングとして対処法とするか、ケアととらえるかが妥当であろう）に関して研究が進み、実践も行われている状況にある。この領域については、日本の教育はまだ萌芽状態であるため、今一度、アメリカの研究・実践に学びつつ、同時に悲しみを感じ、時には症状があらわれる身体に目を向けつつ、いのちの教育を再構築していく必要があると考える。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

青柳路子、いのちの教育再考：日米の教育比較とこころ, からだに注目して、茨城大学道徳教育研究会編『特別の教科 道徳に向けた理論と実践 2』、査読なし、2018、pp.33-46.

青柳路子、子どもの「個性化」：ユング、フォードム、キューブラー＝ロス、茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学・芸術）、査読なし、67巻、2018、pp.115-128.

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

青柳路子、「性の多様性」と道徳教育：小学校・中学校の道徳科学習を生かして、茨城大学教育学部学校教育教室編、教育の最新事情と研究の最前線、2018、pp.136-150.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等：なし

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

青柳 路子 (AOYAGI, Michiko)  
茨城大学・大学院教育学研究科・准教授  
研究者番号：70466994

研究分担者、連携研究者、研究協力者はなし。